ゴンタへの告白

あるときはプレーリードッグのように
鼻をひくつかせながら立ち上がり
「おーい、ジョークでも
　　おひとついかが？」
（ありがとう、
　　でも僕には薬のほうがいいかもね）

あるときは赤ん坊の押すカタカタのように
後足をばたばたさせて走り回り
「ほーい、世界は僕のもの、
　　君たちの世界は別にあるのかい？」
（そうだね、哀しいことだけど
　　僕たちのもの、なんてないんだ）

あるときはフードを抱えて、大きな瞳は上の空
せっせと齧るか、詰め込むか
「うぐぐぐ、こいつもまあ食えるよ
　　君たちも似たような食物だね！」
（うん、そうだな
　　僕たちのもなんとか食えるよ）

あるときはあお向けに腹まるだしで
キューイキューイと鼻鳴らし
「むあむあ、満ち足りた眠り
　　君たちはそれを体験したことあるかい？」
（そう…眠りを体験するって難しいな
　　でも、満ちたりた時間ってのはほんの少しね）

ああ、ゴンタ
僕たちを包む世界は
決して君たちの世界より広くはないんだ

ねえゴンタ
僕たちが胸に宿す心は
決して君たちの心より豊かではないんだ

ああ、ゴンタ

君は僕ほど無邪気じゃないんだね
耳をそば立て
ひげをあちこち動かして
この大気に満ちるものを感じているんだろう
僕はそれに耐え切れそうにないんだよ

ああ、ゴンタ
僕は告白する
絶望と歓喜が入り混じった
白濁したガスを撒き散らしていることを

無邪気になるほどに
耐え切れなくなるほどに
それは広がってゆく———
そのことを

蒼ざめた優しさが大気に満ちはじめ
肩を抱き
キスを交わし
冷えた涙が頬をつたうだろうことを

僕たちの世界は、そうして
河の流れの中に
君たちの知っている時間にみたされた
そんな河の流れの中に浸されてゆくだろう———
そのことを……

(2001.10.4)